

# 多様な専門領域の教員同士による授業開発の事例研究

A Case Study Collaborative Development on Teachers in Various Disciplines.

○ 望月 紫帆\*

西之園 晴夫\*

坪井 良夫\*\*

Shiho MOCHIZUKI Haruo NISHINOSONO Yoshio TSUBOI

特定非営利活動法人学習開発研究所\*

京都市教育委員会\*\*

NPO Institute for Learning Development

Kyoto-city Board of Education

**要約** 教員が専門職の資質能力を日々高め続けるためには、教科を越えた学び合いが重要である。さまざまな教科間で学び合うしくみを導入している京都市立中学校の採用1年目教員の夏季研修において、異なる教科の教員同士で模擬授業を設計する様子を分析したところ、授業者役の教員と異なる教科の教員は、その授業で採用する教育技術（「わざ」）の選定を通して授業の方略を理解することによって、その後教科内容に関わる作業を担えるようになることがわかった。

**キーワード** 授業研究、教員研修、チーム、授業設計、異教科間交流

## <問題提起>

第82回総会（文部科学省 2012）における「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」では、教職生活の全体を通じて自発的に資質能力を高めること、とくに増加する若手教員に求められる資質としてチームで課題に対応できる力量形成への期待が示されている。しかしながら、学校内で若手教員の研修機会として教科別に研究会が開かれた場合、教科毎の教員の人数によって研修機会に格差が生じる。したがって、日常的に資質を高めるためには、他の教科担当者とも協力しながら授業研究できる枠組みが必要である。

京都市は採用後5カ年間の研修計画を立てており、筆者らは採用1年目研修および2・3年目研修を共同開発した（望月ほか 2009, 2011）。とくに採用1年目研修では、同じ教科の担当者だけでなく、異教科の教員とも協力して学ぶ構造を組み入れることにより、学習プロセスに焦点化した授業設計ができることを目指している。これまでの研究（望月ほか 2009）から、授業分析で抽出した教育技術の交流により、学習者の学びに即した授業が設計できることがわかったが、異教科間で授業設計を行う場面でどのように関わり合うのか、その変容過程や課題点は明らかではない。

## <研究目的>

本研究では、全教科が集合して四日間にわたって学ぶ採用1年目の夏季研修に参加し、異教科の教員で組まれたチームが行う授業設計の過程に焦点を当て、参加者の関わり方の特徴や課題を明らかにするために、その変容過程を分析する。

## <対象>

京都市の採用1年目夏季研修（表1）での授業の協同設計は、①設計②実施③分析④再設計のステップを経て行う。このうち、①と②は研修3日目に、③と④を4日目に行った。本研究では、異教科のメンバーで組まれたチームの①設計過程に焦点化するため、技術科2名と美術科1名の教員チームを分析対象とした。

## <研究方法>

分析対象チームがカードシミュレーション式の模擬授業の準備過程で時間内に完成させるよう協力している様子をビデオカメラで記録し、文書化したものと、フィールドノートの記録を用いながらメンバーの変容を解釈した。なお、分析対象チームの設計はつぎのような手順で行われた。

- 1) 全員あらかじめ指導案を用意しているが、チームの中で1名の指導案を選ぶ。（分析対象チームでは技術科の教員aが選ばれた）
- 2) とくに検討したい10分間の授業に絞り、そ

の10分間の模擬授業の準備を行う。

- 3) 模擬授業は判断過程をカードシミュレーション式で視覚化するため、指導案で予定している事象(説明、発問、学習活動、指導、設問等)をカード化する作業を分担して行う

表1 2012年度の夏季研修会の概要

設計	京都市総合教育センター 特定非営利活動法人学習開発研究所
参加者	京都市採用1年目中学校教員101名
期間	2012年8月 4日間
ねらい	各自がもっている技術をはっきり意識し、それを効果的に改善しながら、自慢できる授業を実現するために、チームや学団(学習集団)で協力して学ぶ。
学習集団	同教科チーム(3,4人ずつで構成) 異教科チーム混合学団(3チームで構成)
成果物	学習指導困難のモデル(1日目)、わざカード(2日目)、シミュレーション用カードと記録(3日目)、研修以降の計画(4日目)、レポートと修正された指導案(終了後)
スケジュール	
1日目	課題や目標を明らかにする
2日目	技術を抽出する(授業の分析)
3日目	さらにより方略を練る(カードシミュレーション)
4日目	研修以降の計画(再設計、学習計画)



図1 チームで授業を協同設計する様子

### <結果と考察>

チームの活動記録を分節化し、12ステップに整理し、各ステップにおけるメンバーの各発言カテゴリーの発生数を集計したところ(表2)、授業者である教員aの授業を理解しようとするときに、教員b(同教科)は教科内容から、教員c(異教科)は教育技術(学ぶための「わざ」)から共有しようとしていたことがわかった。後者については、例えばどのような「わざ」が有効かを3日目の演習で作成した「わざ」のデータベースからマッチングを行っている。「わざ」は授業の方略のシンボルとして表現されており、シンボルを介することで異教

科の教員も授業設計に関わることができた。

さらにステップ7以降になると、教員cも教科内容に関わる様子がみられた。ただし、この段階に至るまでに費やした時間は全体の72%を占めており、他教科の教員が教科の内容に関わるまでにはある程度の時間を要している。

表2 授業設計段階の話題に相当する発言数

ステップ	教員			わざ		
	c	b	a	c	b	a
1. 作業手順を考える	0	0	0	4	0	2
2. 展開を見直す	1	22	27	12	6	16
3. 作業手順の再考	0	4	6	0	0	1
4. 作業する	0	13	15	14	13	20
5. 絞り込む	0	1	0	0	0	0
6. 作業する	0	0	1	0	2	1
7. 確認する	5	3	11	4	0	3
8. 指導主事からの指導	0	0	1	0	0	0
9. 作業する	0	4	5	2	0	2
10. 確認する	2	2	6	0	0	0
11. 作業する	0	0	0	0	0	0
12. 確認する	0	0	0	1	0	0

※この段階ではcbaの順で横一列に着席していた

### <今後の課題>

異教科間のチームで授業を設計する場合は、時間をかけて異なる切り口(教科内容、教育技術)から授業者の実現したい授業を共有した後、教科内容に迫った提案を行うので、異教科の教員が参加するためには、授業の方略を簡略化した教育技術(わざ)を介するしくみが有効であるといえる。ただし、異教科の教科内容に関する提案を行うまでにかかなりの時間を要するので、この点について考慮する必要がある。また、今回は同教科のメンバーが2名いる授業が選ばれたが、同教科の教員が一人もない学校あるいは研修で授業研究を実施する場合の設計段階の役割分担などは、今後さらに検討する必要がある。

### <参考文献>

- 文部科学省(2012) 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」。 [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf) (accessed 2012.9)
- 望月紫帆, 西之園晴夫, 齋尾恭子(2009). 生徒の学びに着目した教師の「わざ」を授業設計に活かす教員研修の開発, 日本教育実践学会第12回研究大会論文集, 56-57
- 望月紫帆, 西之園晴夫, 坪井良夫(2011), チームで推進する授業研究の研修プログラムの事例研究, 第27回日本教育工学会全国大会論文集, 557-558